宮本直孝

SPECIAL FEATURE 02

ミヤモト　ナオタカ

2006年、
「forty six portraits of beautiful women」以降、
積極的に写真展を開催してきた宮本直孝氏。
彼の写真展スタイルは「オープンなスペースで
できるだけ多くの人に自分の写真を見てもらうこと」。
昨年8月には、ロンドンパラリンピック開催に合わせ、
選手たちの肖像を地下鉄表参道駅の
コンコースに展示した。「そもそも写真展を
やるようになったのはプロモーションのため」
とのことだが、そのスタンスも変わりつつあるようだ。

P72-73 「Cover Girls」より（2010年6月／スパイラルホール）

P74-75 「PORTRAITS FROM LONDON PARALYMPICS～ロンドン・パラリンピック選手写真展」より（2012年8月／東京メトロ表参道駅コンコース）

P76 「WFPチャリティ写真展 Fill the Cup with Hope」より（2010年11月／GYREギャラリー、2011年4月／日本橋高島屋）

INTERVIEW　Naotaka Miyamoto

「写真展を開く理由」

「Cover Girls」。2010年6月、スパイラルホールでの展示。写真展に併せて大判写真集（写真左）も販売された。

――ここ5、6年、積極的に写真展をされていますよね。それも通常の写真／アートギャラリーではなく、スパイラルホールや、昨年は表参道駅のコンコースといったオープンなスペースがメイン。今日はその辺の写真展に関する宮本さんの考え方を、お聞かせ下さい。

そもそも最初は自分のプロモーション用に女性モデルのポートレイトを撮影して、小冊子のようなものを作ろうとしていたんですが、人から「せっかくだから、写真展をやりなよ」って言われて。

――それが2006年、スパイラルホールでの写真展ですか？（「forty six portraits of beautiful women～46人の女性モデルのポートレイト」）。

写真展なんて「知り合いしか来ないもの」と思っていたんですが、場所が場所だから、一応、アシスタントがカウントしていたんですけど、2500人くらい来場者があった。

――スパイラルホールは、ラウンジを取り囲むオープンなスペースですから。

「とりあえず2500人くらいは通りました」と（笑）。でも通れば見てくれますよ。ネットでも感想を書いてくれる人がいたり、自分のことを全然知らない人でも見てくれるんだと。それが1回目の写真展なんですね。

まぁ、面白かったらから、またやろうかなと思っていて。最初のポートレイトは営業用ということもあったし、習作的なものだったので、カラーでライティングも色々と変えたけど、2回目はモノクロに統一して、それが2010年「Cover Girls」という写真展です。

前回と同じように会場はスパイラル。でも、それもやはり自分のプロモーションというのが一番の目的でしたね。「Cover Girls」って表紙のモデルということでしょ。その頃、雑誌の表紙の仕事があまりなかったから、その不満みたいなものはあったのかもしれない（笑）。

――プロモーションとおっしゃいますが、スパイラルのようなスペースだと、それなりにお金はかかるでしょう？

かかりますよ。でも、そこから仕事につながれば、お金は返ってくるし、多くの人に見てもらえて話題になれば、言葉は悪いですが、営業的にあれほど効果的なこともないですからね。それに写真展って、やってみると楽しいんです。人に評価されたり、話題になることが。

――その展示が次の「WFPチャリティ写真展 Fill the Cup with Hope」（2010年、GYREギャラリー）につながった？

その間に猫の写真展（「THE CATS」）をやはりスパイラルでやっているんですけどね。

「Cover Girls」の時、写真集を作ったんです。ちょっと大判のものを。印刷って版が大きいと高いんですね。プロモーションだから、最初はばらまこうと思っていたんですが、印刷代はかかるし、モデルになってくれた人も有名な人たちだから、さすがにただで配布するのはもったいないなと。

――1冊1,000円でしたっけ？

値段は後で考えたんですけどね。でも、いざ売ろうかとなった時、印刷代がかかっているにせよ、自分のプロモーションとして考えていたものだし、色々な人に協力もしてもらっているわけだから、僕が儲けたらおかしいでしょ。それでその時、モデルになってくれた知花くららさんの紹介で、写真集の売り上げを国連WFPに寄付することになったんです。

――印刷経費以外は国連WFPに？

いえ結局、売り上げ全部、寄付したんです。だってもし写真集の売り上げで印刷代が出なかったら、1円も寄付できないじゃないですか。

それに僕がお金をもらうこと自体、ズルをしているような気もして、結局、入った分は全て、寄付しました。採算を考えてもっと高い値段にしたら誰も買ってくれないし、僕も志高く「1円でも多く寄付しよう」なんて思っていたわけじゃないから、まぁ1,000円という値段で、多くの人に買ってもらって、売り上げは全部、寄付をしたということなんです。

だから最初は「仕方なく」から始まっているんですよ。会場費、パネル代、写真集印刷費、数百万かかるわけですが、で

「THE CATS」。「Cover Girls」と連続して、2010年7月よりスパイラルホールで開催。様々な猫をファッションポートレイト風に撮影。

「WFPチャリティ写真展 Fill the Cup with Hope 」。モデルたちが赤いカップを持ったポートレイト。2010年9月、表参道GYREギャラリー。

2012年8月、東京メトロ 表参道駅 ADウォールを使って、パラリンピックの選手たちのポートレイトを展示。

みやもと・なおたか

1961年	静岡県生まれ。1984年 早稲田大学中退、渡伊。
1990〜91年	オリヴィエーロ・トスカーニに師事。
1993年	帰国、独立。
2003年	渡伊、PHOTOGROUP SERVICE に所属。
2005年	帰国。

〈EXHIBITION〉

2007年9月	「forty six portraits of beautiful women」スパイラルホール
2010年6月	「Cover Girls」スパイラルホール
2010年7月	「THE CATS」スパイラルホール
2010年11月	「WFPチャリティ写真展 Fill the Cup with Hope」GYREギャラリー
2012年8月	「ロンドン・パラリンピック選手写真展」東京メトロ 表参道駅 ADウォール／他

きるだけ多くの人に写真を見てもらいたいということですよね。もっと大きな額だと、さすがに考えてしまうけど（笑）。

そしてその結果、国連WFPからチャリティ写真展の話を頂いたという経緯ですね。今度はモデルに（学校給食支援のシンボルの）赤いカップを持ってもらい撮ってくれないかと。

表参道駅のADスペースを使った写真展示

――国連WFPのチャリティ写真展に続いて、昨年は、表参道駅でロンドン・パラリンピックの選手たちの肖像を展示した。写真展のテーマが、どんどんメッセージ性の強いものになっているようですが。

いろいろと経緯はあったのですが、国連WFPの写真展をやった時、Twitterの感想で「綺麗だけど…」みたいなものがあって、それは「綺麗なだけじゃん」ってニュアンスだったと思う。確かにモデルを撮っているんですが、僕は彼女たちの外見だけじゃなく中身も撮ったつもりでいたから、チャリティのような写真展ではそう見る人もいるのか、と。

それならモデルじゃない人たちを撮ったらどうか。スポーツ選手とか。それで行き着いたのが、ロンドン・パラリンピックの選手たちの肖像なんですね。ちょうど大会の時期も近かったし。僕自身、そういう選手たちに会ったことがなかったから、実際、ハンディキャップを乗り越えて来た人たちはどういう人たちなんだろうという思いもあったんです。

でも実際、会ってみると普通の人たちなんですね、当たり前ですけど。でも、充実していると感じました。それに自信。障害を乗り越えて選手に選ばれたという自信ですね。

彼らはプロのモデルでもないし、最初は競技をしているシチュエーションで撮ろうとして、実際に何枚か撮ったんですが、絵にならない。やはり本当の競技ではないから、彼らの顔も真剣にならないだろうし、競技写真に負けてしまう。じゃ、やはりストレートなポートレイトで勝負しようと。それで1枚、撮ってみたら「いけるじゃないか」と。

なんで絵になったかはわからないですけど…。障害のない人が車椅子に座って、同じセットで撮っても同じ絵になるのか、それとも彼らの自信のせいなのか。これは今でも、なぜなのか、わからないですね。

――そして、その写真を展示した場所が地下鉄、表参道の駅。スパイラルよりもさらにオープンなスペースですよね。

スパイラルがその時、改装中だったということもあるんですが、もともと第一候補として駅の通路を使えないかなと思っていたんです。表参道の通路は、以前、スパイラルの展示の時、告知ポスターを掲出したことがあって、あの広告スペースを一定期間買えば、写真が展示ができるのではないかと。

――普段は連貼りのポスターが貼ってあるところですよね。

通る人数は半端じゃないですからね。それに美術館やクローズドなギャラリーには、ちょっと否定的な部分があって。「美術館に行く自分って素敵」っていうか（笑）。写真もそこに飾られるだけで「素敵」に見えるじゃないですか。照明もちゃんとしているし、壁も白い。見る方も、わざわざそこに行くわけだから、真剣に見るでしょう。でも、写真が全然素敵に見えない駅の通路のようなところで、絵になったら本望かなって。

――あの表参道駅での企画も、全て個人でやられたんですか？

そうですよ。どこかからお金をもらったわけじゃないし。自分であのスペースにお金を出して、東京メトロと交渉して。あそこは広告スペースですから「写真展」という扱いではないんですけどね。

――実際、展示してみてどうでした？

「そこを通る人の足を止めて感動させてやろう」って、そういう計算はあったのですが、「計算通りか」と言うと、少し違うかな。想像していたのと違ったのは、興味を持って真剣に見てくれる人と、全く無視して通り過ぎる人が、極端に別れたということ。通り過ぎた人は、単に急いでいただけなのか、興味がないのか、それともあえて見たくなかったのか、それはわかりませんけどね。

独立して10年間は作品制作すらしてなかった

そもそも僕は、最初の写真展を開くまで、自分の作品とか仕事以外の写真は、ほとんど撮ったことがなかったんですよ。

――写真家としてスタートしたのは93年ですよね。それまでイタリアでオリヴィエーロ・トスカーニのアシスタントをしていた。

有名フォトグラファーのアシスタントしていたんだから、日本に帰ったら楽勝だなって、志が低かったんです（笑）。実際に楽勝だったんですよ。海外でアシスタントしてきた人も、今よりは少なかったし、当時、トスカーニと言えばベネトンで凄かったから。

でもしばらくすると、まだ経験は少ないわけだし、ほんとは実力も伴わないから下がってくるんです。そのまま10年間。喰うには困らないけど、なんか不満もあるわけですよ。雑誌だってもっと大きなスペースで写真を使われたいし、コマーシャルでも、僕よりも若い新しい人が出てくる。

なんかあっという間で、何も記憶に残らない10年間でしたね。その間、写真展どころか自分の作品すら撮っていない。

で、「これじゃいけない」ともう一度、イタリアに行って、2年ほど向こうで仕事もして、また日本に戻って来て、その時にはもう42、43歳。「こんな人、いたっけ？」みたいな感じになっていた。

――そこから作品撮りを積極的に始めた。

そうですね。それが最初の写真展につながるんです。それでようやく名前を知ってもらった。だから本当のスタートは40歳になってからですよね。未だに、若干、謎なんじゃないですか？　最近、何となく名前は見るけど、歳もわからないし、どういう経歴かもわからない。でも、写真展をやると、知らない人からも仕事の連絡が来るんですよね。

――プロモーション的には成功だったと。

実を言えばブックを持って営業に回ったり、営業の電話を掛けたり、一時期は一生懸命やっていたけど、面倒だしイヤなんですよ。イヤなことを一生懸命やるより、写真展とか自分が面白いことを一生懸命やった方が結果的に良いかなって。

――しかしプロモーションということで言えば、国連WFPやパラリンピックの写真は、方向性が違って来ていませんか？

流れでそうなったというか。プロモーションの意図がないわけではないけれど、やはり充実感じゃないですか？　プロモーションのメリットと、多くの人が見てくれる充実みたいなもの。確かに国連WFPもパラリンピックも、その比重が逆転していますよね。パラリンピックのような写真だと、たとえば女性誌のプロモーションには逆効果かもしれないし。「何か難しそうな人」とか思われて（笑）。

でも、最近は「それでいいかな」と思ってます。プロモーションの効果はあまりなくても、表参道の駅に写真を貼って何万人もの人に見てもらう。「考えてみたら、そっちでいいや」ってなってきているかな。それをやるためには、仕事をして稼がなくてはいけないわけで、普段の仕事がなくなったら困るけれど、まぁ、それでも良いかなって。

掲載作品クレジット

P72-73
「Cover Girls」
CD：富田光浩
AD＋D：川上恵莉子
Hair：西村浩一・hanjee・Take'
Make：桜井浩　Ret：佐藤加奈子
MODEL（左ページ上段左から右）：今宿麻美・浦浜アリサ・岸本セシル・清原亜希・黒田知永子・SHIHO・紗耶・比留川游・ブレンダ・山田優・リナ・ヨンア
MODEL（右ページ）：杏

P74-75
「ロンドン・パラリンピック選手写真展」
AD＋D：川上恵莉子
MODEL（左ページ）：鈴木孝幸
MODEL（右ページ上段左から右）：秋山里奈・田口亜希・三浦浩・藤田征樹・浅川信正・伊藤智也、山本篤・佐藤真海・京谷和幸

P76
「WFPチャリティ写真展
Fill the Cup with Hope」
AD＋D：杉山正
Ret：佐藤加奈子
MODEL：水原希子